



TITLE:

最近五十年支那學界の回顧(三)

AUTHOR(S):

マスペロ, アンリ; 内藤, 耕次郎; 内藤, 戊申

CITATION:

マスペロ, アンリ ...[et al]. 最近五十年支那學界の回顧(三). 東洋史研究
1936, 1(4): 366-375

ISSUE DATE:

1936-04-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138692>

RIGHT:

最近五十年支那學界の回顧 (三)

アンリ・マスpero

内藤耕次郎 共譯
内藤 戊申

文學 この時代の文學史は古代のそれ程には研究されて居ない。言語そのものの研究は Schank が先鞭をつけた。^① B. Karlgren 氏及び H. Maspero 氏の業績は七世紀頃の支那語の發音の状態、並びにその後の進化の有様を明にしたし、又唐代に於ける文語と口語との關係も調べられた。併し乍らかの經學史上の大問題、即ち紀元前二百年の間に於て古い典籍が再び發見され、且復原されたこと、並びにそれに繼いで幾多の註釋が作られたこと等の問題に至つては未だ殆んど手を着けられて居ない。蓋し古書の佚亡は非常に短期間のことであつたに違ひない。といふのは紀元前三世紀の末頃の著作家達は先人の書を未だよく識つて居たのだから。古書の佚亡は、かの秦の始皇の焚書（紀元前二一三年）の爲よりも寧ろ

筆の發明が齎した文字の變化に、より多く起因してゐる様に思はれる。^② 古い文字は間もなく忘れられて了つたので、その短い過渡期の間に轉寫されることのなかつた書物の全ては、やがてその意味が分らなくなつて了つたのである。且又當時の書物は毀れ易いものであつた。それは巾の狭い竹簡を綴り合はせたものであつて、各簡にはわづか一二行しか書いてなかつた。ほんの一寸した不始末でもそれが直に致命的な結果を齎することになるのであつた。といふのは一度紐が切れて竹簡がまざり合ふと、本文が簡略である爲にそれを整理することは頗る困難であつたからである。^③ けれども若干の書物、殊に何等かの意味で人に智識を與へるのに役立つ様な書物はたしかに間もなく書き寫されたものらしい。だがそれより後

に見出されたその他の書物に至つてはやつとのことと判讀された次第であつた。漢の帝室の一族の諸王、淮南王、河間王等は古い寫本を蒐集したが、後には彼等の藏書は結局帝室文庫の中へ合併された。紀元前一世紀の後半に於て、最初は劉向が、次で彼の死後その子劉歆が統裁してゐた一つの委員會が諸々の著書を分類し、且種々の異本を比較して批判的な定本を作つたのは即ちこの文庫に於てであつた。現存する古書の殆んど全部はこの二人の學者の手を経て居る。現代支那の文獻學派は劉歆に對して甚だ苛酷であつて、彼等は劉歆がその保護者である纂奪者王莽の典禮上の改革を支持する目的で多くの偽作を爲したといつて歆を非難するのだが、此見解は誇張に失して居ると言はざるを得ない。けれども前にも述べた所の三世紀に於ける（書經その他の）偽作のことは確實であつて、それ等は^④Pelliot 氏も指摘した如く、その大部分は當時の一流の學者の一人であつた王肅並びに其學派の作である様に思はれる。本文の刊行の外に支那の學者達は註釋をも作つた。だがこの重要にして、且深き研究に値すべきそれ等註釋の研究に至つては Legge がその古典翻譯の序文中に公にした簡略な記事を除いては、前に

述べた Pelliot 氏の尙書釋文（七世紀に陸德明が作つた書經の註釋）の製作に關する研究以外に殆んどそのことあるを聞かない。

註

① B. Karlgren, Études sur la phonologie chinoise (支那語發音學の研究), Arch. d'Ét. orient., XV, 1-4, 1915-16. 所載。

H. Maspero, Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang (唐代長安の方言), B.E.F.E.O., 1920, n° 2, 1-123 所載。 Sur quelques textes anciens de chinois parlé (白話の古文獻に就て), 同上 1914, n° 4, 1-86. 所載。

③ Meste, Quelques résultats d'une comparaison entre les caractères chinois modernes et les siao-tchouan (近代の支那の文字と小篆との比較研究の二三の結果), 1925.

④ Chavannes, Les livres chinois avant l'invention du papier (紙の發明以前に於ける支那の書籍), J. as. 1905 所載。

⑤ Mém. concern. l'Asie orient., II (1916), 123-177. 所載。

純粹の文學は極く最近始めて注意を惹くに至つたばかりである。^①Hervey de Saint-Denis が複雑な作詩の規

則を手短かに説明したことがあるきりで、それ以後この方面の問題に就ては何等の新研究も寄與されて居ない。

古代の偶數韻律(四、六字の詩等)より、漢代の奇數韻律(五、七字の詩)への變遷の歴史や、平仄の規則の起源等に就ては全く未研究のまゝになつて居る。これまで實現されて來たのは主として翻譯の仕事であつた。これによつて吾々は、各時代の詩に就てのいくらかの概念は得ることが出来る。三世紀の逸名の「詩人の名篇」「孔雀東南飛」は張鳳氏によつて、次で Aroussseau 氏によつて譯され、又この時代の大詩人陶潜の詩の全部及び散文の一部は Anna Bernhardt 夫人によつて譯されて居る。六朝時代に關しては、Waley 氏の著を見れば簡單な知識が得られるが、不幸にしてそれは陳祚明氏の小著を補ふにも足らず、又 H. Imbert が譯した隋の煬帝の詩を併せても完全なものとならない憾みがある。唐朝の詩を集めたものとしては、Hervey de Saint-Dennis が引用した詩の集録が結局今日でも尙最良の榮を保つて居る。併し、別に若干の大家、即ち李太白、杜甫、白居易、韓愈等の無數の詩の中の或るものは Von Zach 氏や Waley 等によつて譯されて居る。最後に、宋の詩人に就ては Soulié de

Morant 氏の集がある。

註

① Poésies de l'époque des T'ang (唐代の詩), 1862, 序文。

② 張鳳「孔雀東南飛」一九二四年。

Aroussseau, Deux paon se sont envolés (孔雀東南飛), Études asiat. pub. à l'occ. 25^e anniversaire de l'Éc. fr. d'Extr. Orient, t. I, 1925, 1-36. 所載。

③ A. Bernhardt, Tao Juan-ming (365-428). Leben und Dichtungen (陶淵明の傳記と彼の詩), Mitt. Semin. f. or. Spr., 1912. 所載。

A. Bernhardt et E. von Zach, Tao Yuan-ming (陶淵明), 同上 1915, 179-260. 所載。淵明は陶潜の字で 420。

④ A. Waley, Pre-t'ang poetry (唐以前の詩), Bull. of the School of or. studies, 1917, 33-72. 所載。

⑤ 陳祚明, Anciens poèmes chinois d'auteurs inconnus (古詩選), 1923.

⑥ H. Imbert, L'empereur Yang-ti, le Sardanapale chinois. Poésies (支那のサルダナパール、煬帝と彼の詩), 1922.

⑦ Forke, Ausgewählte Gedichte Li Tai-pos (李太白詩選), Blüten chinesischer Dichtung, 1899. 所載。
Otto Hauser, Li Tai-po (李太白), 1891.

A. Bernhardt, *Li T'ai-po* (李太白), *Mitt. Sem. f. or. Spr.*, 1916, 105-131. 所載。一〇七—八頁に既譯の詩の文獻目錄を附す。

E. von Zach, *Gedichte von Tu Fu* (杜甫の詩), *O. Z.*, 1920-21, 1-9. 所載。

L. Woitsch, *Aus den Gedichten Po Chü-i's* (白居易詩選), 1908.

A. Waley, *Poems by Po Chü-i* (白居易), *Bull. School of or. stud.*, 1917, 53-78. 所載。 Further

poems by Po Chü-i, 同前 1918, 96-112. 所載。 A

hundred and seventy poems, 2nd part. (白居易の詩六十篇をその中に含む)

Arousseau, *Han Yu* (韓愈), *Bull. assoc. amic. franco-chin.*, 1910, 50-56. 所載。

Watters, *The life and the works of Han Yu* (韓愈), *J. Ch. Br.*, 1871-72, 165-181. 所載。

⑧ *Soulié de Morant, Florilège des poèmes des Song* (宋人の詩集), 1922.

宗教 この時代は宗教的見地よりすれば甚だ重要な時代である。即ち、一方では統一帝國といふ全然新しい社會的還境に遭遇することによつて古代の宗教はその形を變へて行き、他方佛教が新しい理想を携へて印度から入つて來てその根をはり始め、同時に新宗教である道教

も次第に形成されて行くといふ有様であつた。だが今のところでは不幸にして細部の或る點がいくらか調べられに過ぎないといふ状態である。國教の歴史も未だ嘗て着手されたことがないのだが、次の様な問題はたしかに興味ある研究題目であらう。即ち一方に於ては、歴代の學者達が、古代の典禮の書の至る所に不完全に散見する古い儀式を復興しやうと絶えず努力して來たこと、並びに保守派と改革派の兩派が、共に「正統」の名に於て屢々互に激しく争つたこと—或る特殊な祭の歴史、即ち、

① *Chavannes* が述べて居る東岳の祭の歴史などはその好例である—、他方、漢代に於ては儒教を採用することによつて、實際の典禮の上に、倫理學や乃至は幼稚なる合理的形而上學(之は易經から引き出されたものだが)を積み重ねやうといふ様な、又ずつと降つて宋代に於ては更により進歩した形而上學を創り上げやうといふ風な哲學的努力がなされたこと等の諸問題がある。之が史料の一部は、典禮と儀式に關しては *De Groot* が、教義に關するものは *P. Wiegand* が蒐集して居る。更に又、*Forke* 氏の譯した王充の論衡及び崔寔の政論の斷片を *Kuhn* が翻譯したもの—甚だ拙劣な譯だが—を見れば、後

漢時代の學者間に存した支那思想の或る様式を定めることが出来る。かゝる立場よりして最もよく研究されて居るのは、夫の一群の哲學者、五子に就てであつて、彼等は十一、二世紀の頃に於て、一つの哲學體系を、特に其競争相手である佛教や道教の體系と比肩し得る様な、筋の通つた一つの形而上學を古典の中から抽出すべく努力したのであつた。彼等の著述の中、最も重要なものは已に譯されて居る。即ちその學派の創始者、周敦頤の二つの著、通書と太極圖説とは夫々 Grube の Gabelentz の立派な譯があり、彼の弟子張載の西銘は C. de Harlez が譯して居る。朱熹の傳記と思想とは P. Le Gall 並びに最近 Rév. Bruce によつて譯された。之に反して彼等の反對者、王安石のことは⁽⁷⁾ Ivanov と梁啓超氏の著述があるにも拘らず未だによく識られて居る。

註

- ① Chavannes, *Le T'ai-tchan* (老子), 1910, Musée Guimet, Bibliothèque, t. X. 所載。
- ② De Groot, *Religious system of China*, 1882-1907. P. Wiegert, *Historie des croyances religieuses...* (宗教信仰史...), 前出。
- ③ A. Forke, *Lun-hêng* (論衡), *Mitt. Sem. or. Spr.*,

IX-X, 1906-07. 所載。

Fr. Kuhn, *Das Dschöng Lun d s Tsui Schi, eine konfuzianische Rechtfertigung der Diktatur aus der Han-Zeit* (崔寔の政論 漢代の爲政者の儒教的正統化), *Abh. k. Preuss. Ak. Wiss.*, 1914. 所載。

④ W. Grube, *Ein Beitrag zur Kenntniss der chinesischen Philosophie: T'ung-shu des Ceu-tsi, mit Cuhis Commentare nach dem Sing-li tsing-i* (支那哲學の智識に關する一研究 周子の通書 並びに性理精義に於ける朱熹の註釋), 1880 et 1881.

G. von der Gabelentz, *Thai-kih-thu, des Tschu-tsi-Tafel des Urprinzips mit Tschu-His Commentare nach dem Hoh-pih-sing-li* (周子の根本原理の圖太極圖並びに合璧性理に於ける朱熹の註釋), 1876.

⑤ C. de Harlez, *Le Si-ming, traité philosophique de Tch'ang-tze* (張子の哲學綱目 西銘), *Actes VIII^e Congrès intern. orient.*, IV, 1889, 33-52. 所載。

⑥ P. St. Le Gall, *Le philosophe Tchou Hi, sa doctrine, son influence* (哲學者朱熹の學說とその影響), *Var. Sin.*, n°6, 1894. 所載。

Rev. J. Bruce, *An introduction to the philosophy of Chu Hsi* (朱熹) and the Sung school (宋學派), 1920. 及び *The philosophy of human Nature by Chu Hsi*, 1922.

⑦ Ivanov, *Vang An-shi* (王安石), *Publ. Fac. L.*, or.

Univ. Saint-Petersbourg, n° 29, 1909.

梁啓超「王荊公傳〔王安石の傳記〕」一九〇九年、飲氷室叢書、第四種、史傳今義所載。

Kopsch, Wang An-shih (王安石), the Innovator,

Ch. Rev., II, 29-33, 74-80. 所載。並に

Rev. I. Headland, The Edward Bellamy of China, or the political condition of the Middle Sung (宋中期), 同、XXXV, 205-213, 259-264 所載、等參看。

基督紀元の頃、印度の一宗教なる佛教が支那に齎された。其布教師等が最初に支那に來た正確な年月は分らない。その頃は、紀元後六十年若くは六十四年に天子が或る靈夢を見て、其後に彼等がやつて來たのだといふ正史の記事は、^①H. Maspero 氏及び最近には常盤氏^②、Forke 氏が指摘した如く、一つの傳説に過ぎなからである。^③Forke 氏は中央亞細亞を経て傳はつた佛教傳播の跡を辿つて、支那への傳來をもう一世紀半古の所へ持つて行けると考へたが、之は誤である。^④Chavannes は略基督紀元迄しか溯り得ないと言ひ出したが、此方がより本當らしい。二世紀の終頃に至つてこの新宗教は隆盛の域に達し、帝國の中には幾つかの教團が散在して居たし、^⑤經典も翻譯されて居た。その中の一つは、支那で編纂され

た最古の佛教の論、即ち「四十二章經」として知られて居る。有能なる學者の信者、牟子が小論を著したのはこの頃か或はもう少し後のことである。之は元來相當有名な書物なのだが、^⑥Pelliot が翻譯して註釋をつけたので一層重要なものとなつた。^⑦Parker は紀元後四百年間に於ける、支那内地の佛教寺院、及びその西方佛教國との關係に就いての興味ある、頗る明細な表を作つて居る。擬支那の修道者達は、間もなく印度人の布教師が來るのを待つて居ることに満足出來なくなり、所謂「西方求法」に出かけることになつた。最も有名なのは法顯（三九九—四一四）、玄奘（六二九—六四五）、義淨（六七—六九五）等で、^⑧いづれも浩瀚なる紀行を遺して居る。これ等の手記は夫々^⑨Abel Rémusat, Stanislas Julien 及び Chavannes によつて譯され、更に色んな學者によつて研究され、且註釋を施されて居る。^⑩Chavannes は彼等の傳記の多數を翻譯したが、別に彼は、西方から支那に傳はつた傳説の多くの要素は彼等が齎したのであることを指摘した。^⑪かくて次々に翻譯された文獻は非常な數に上つて居る。南條氏の大藏目錄を検すればその間の有様が分るであらう。又姉崎氏は漢文、梵文バーリー文の文獻を引

きはして調べたが、それによると少くとも經典に關する限りでは、支那の藏經はその豊富さに於て印度や西藏のものに決して劣らないことが分る。而も佚亡した多くの文獻があつたわけで、それ等は昔の目錄によつて知る外はない。之が研究は數年前⁽¹³⁾ Prabodh Bagchi によつてその緒を開かれたばかりである。又一方、支那佛教の內面的歴史及び若干の特殊な宗派に關しても多くの研究がある。即ち Noël Péri⁽¹⁴⁾ の鬼子母神信仰及び「韋駄天」に關する研究、⁽¹⁵⁾ Chavannes 及び Sylvain Lévi 氏の十六羅漢信仰に關する研究、並びに南條氏、松本氏その他の日本の學者の研究等である。日本の學者——僧俗を問はず——が貢獻した佛教研究の全てをここに數へ上げることは殆んど不可能であらう。大藏經の二つの出版の外に彼等は數々の特殊研究をも發表して居る。彌勒信仰、禪宗、阿彌陀佛信仰及び淨土宗等の歴史がそれである。

註

- ① H. Maspero, *Le Songe et l'Ambassade de l'empereur Ming, étude critique des sources* (明帝の靈夢遊使、資料の批判的研究), B.E.F.E.O., X, 1910, 95-130. 所載。

常盤大定、漢明求法説の研究、東洋學報、一九二〇年、第十卷、第一號、一一四八頁所載。

- ② O. Francke, *Die Ausbreitung des Buddhismus von Indien nach Turkistan und China* (印度よりトルキスタン及び支那への佛教の傳播), Archiv. f. Relig. Wiss., 1909, 207-220 所載、及び *Zur Frage der einföhrung des Buddhismus in China* (佛教の支那傳來の問題に就て), Mitt. Semin. f. or. Spr., 1910, 295-305. 所載。
H. Maspero, B.E.F.E.O., 1910, 620-636 所載參照。
③ Chavannes, *Les pays d'Occident d'après le Wei liu* (魏略に見る西方諸國), T'p., 1905. 所載。
④ H. Maspero, *Communautés et moines bouddhiques chinois aux II^e et III^e siècles*. (二世紀及び三世紀に於ける支那佛教の教團と僧侶), B.E.F.E.O., 1910, 222-232. 所載。
大谷勝眞、支那に於ける佛寺造立の起源に就て、東洋學報、一九二一年、第十卷、第一號、六九—一〇一頁所載。
⑤ S. Beal, *The Sūtra in 42 sections*, J. roy. As. Soc., 1862, 387-349. 所載。
De Harlez, *Les 42 Leçons du Bouddha* (四十二章經), 1889. ①の支那語の小著の法藏譯と Schiefner (1862), Léon Feer (1878), Rockhill (1882) の總譯とに居る。
⑥ Pelliot, *Meou-tseu ou les doutes levés* (若干の疑惑), T'p., 1919-20, 265-488. 所載。

- ⑤E. H. Parker, *Chinese Buddhism*, As. quart. Rev., 1902, 372-390. 所載。
 ⑥Rémusat, *Foe koue ki ou Relation des Royaumes buddhiques* ... par Chy Fa-hian (釋法顯の佛教國紀行 佛國記), 1836.
 St. Julien, *Histoire de la vie d'Houen-thsang* (玄奘の傳記), 1853. Mémoires sur les Contrées occidentales, par Hiouen-thsang (玄奘著大唐西域記), 1857-58.
 ⑦Chavannes, *Les Religieux éminents qui allèrent chercher la Loi dans les Pays d'Occident, mémoires composés par I-tsing* (義淨著西域求法高僧傳), 1894. 佛國記は左の二人にちつとも譯せられて居る。
 H. Giles, *Record of the Buddhist Kingdoms*, 1877. Legge, *A record of Buddhist Kingdoms*, 1886. 玄奘に關しては次の様なものがある。
 T. Watters, *On Yuan-chwang's* (玄奘) *Travels in India*, 1904-05.
 義淨の今一丁の旅行は高楠氏にちつとも譯せられて居る。
 A record of the Buddhist Religion as practised in India, by I-tsing, (義淨著) 南海寄歸內法傳, 1886.
 ⑧Chavannes, *Gunavarman* (求那跋摩), Tp., 1904, 193-206 所載。Jinagupta (闍那瞞多), 同上 1905, 332-356 所載。L'itinéraire d'Ou-k'ong (悟空記), Jas., 1885 (VI), 341-384. 所載。Voyage de Song Yun dans l'Udyāna et le Gandhāra (宋雲の烏仗那及び健陀羅旅行), F. E. F. E. O., 1903, 379-481. 所載。
 Seng-houei, (善懷會) 三ノ〇時跋, Tp., 1909, 199-212. 所載。Cinq cents contes et apologues extraits du Tripiṭaka chinois (康僧會の六度集經), 1910-11.
 ⑨南條文雄 A Catalogue of the Chinese translation of the Buddhist Tripiṭaka, 1883.
 ⑩波鐸出般 The four Buddhist Agamas in Chinese, a concordance of their parts and of the corresponding counterparts in the Pāli Nikāyas, Transact. Asiatic Soc. of Japan, 1908. 所載。
 ⑪P. Bagchi, *Le Canon bouddhiste en Chine*. Les traducteurs et les traductions, (漢譯佛典の譯者及び譯語), 1926.
 ⑫N. Peri, *Haritī la Mère de démons*, (鬼子母), B. F. F. E. O., 1917, n°3, 1-102. 所載。Le dieu Wei-to, (韋駄天), 同上 1916, n°3, 41-56. 所載。
 ⑬S. Lévi et Chavannes, *Les Seize Arhats protecteurs de la Loi*, (護法者) 十六阿羅漢, J. as., 1916. 所載。
 ⑭松本文三郎 彌勒淨土論 一九一〇年。
 山田孝道 禪宗辭典 一九一五年。
 松本文三郎 達磨。
 濱口 曇鸞大師傳(六世紀) 一九〇五年。

佐々木月樵、支那淨土教史、一九一三年。

橋端超、二樂叢書、一九一三年。

松本文三郎、極樂淨土論、一九〇四年。

矢吹慶輝、阿彌陀佛の研究、一九一一年、等。

最初の佛教布教師等は、佛教の中には自分等と同じ思想があると誤信した一群の道家の人々の間に於て好遇を受けたらしく、その經典翻譯に當つて道家の用語を頻に借りて居る。誤つて生じたこの脆い關係は、併し間もなく絶えて了つた。けれどもこの關係はこれ等道家の人々の間に甚だ強い佛教的影響を遺したものであつて、紀元二世紀に、一つの更新せる道教ともいふべきもの、即ち純粹に道教的な觀念や宗禮に佛教から出て居る觀念や宗禮が入り交つて居る所の新道教を生ぜしむるに至つて居る。數々の所産と共に今日迄存續して居るこの道教の起源をば^①Imbault-Huart 及び De Groot は研究したし、漢代より元代に至る、この宗教の進化の長い經緯は妻木氏によつて簡略に跡づけられはしたが、結局その歴史は未だよく識られて居るとは言へない。蓋し道教の研究は次の様な事情の爲に大に遅れて居たのである。その事情とは一つにはかの浩瀚なる道教の經典は—P. Wiegner^③は之が目錄を作つて居る—最近やつと再び版になつたばか

りであること（この前の刊行は一五〇六—一五二一年である）、又一つには道教の著書は概してその年代がはつきりして居ないことである。唯道家と佛教徒との長い間の論争に關する細い研究はいくらかされて居る。その中で最も重大な論争、即ち佛陀と老子との關係に就ての論争をば、道教の假經である化胡經—この書では老子を印度迄連れて行つて、老子が佛陀の師であることにして居る—に基いて Pelliot^④ が研究して居る。この經は數回政府に禁止されて、今日では佚亡して了つたが、その中の數章は燬煌で發見された。教義と宗禮に關するものは殆んど無いし、根本的な書物も何等研究されて居ない。唯餘り重要でない若干の小著が、それも甚だ拙く譯されて居るのみである。「投龍簡」なる特殊な儀式に關しては^⑤Chavannes の論文がある。神話學と肖像學とは比較的よく調べられて居り、Edkins と Hubert Mueller との二つの論文は、いはゞこの非常に複雑なパンテオンに入る道順を示すものと言へやう。尙この他、戰の神、文學の神、八神等の重要な神々に就ての研究がある。^⑥

これ等の宗教と支那の國教との關係、即ち迫害乃至融合の有様は^⑦De Groot によつて敘述されて居る。彼は支

那の政府が自稱する所の信教の自由なるものと真相を摘
き、儒教の正統が如何に強硬に異端の説を責めたかを明
にした。

(未完)

註

①C. Imbault-Huart, La légende du premier pape des taoïstes et l'histoire de la famille pontificale de Tchang (道家の教祖の傳説と彼の天師の家、張氏の歴史) J. as., VIII, iv(1884), 389-461. 所載。

J. J. De Groot, On the origin of the taoist Church, Trans. 3d Intern. Congress Relig., 1908, I, 138-149. 所載。

Pelliot, Autour d'une traduction sanscrite du Tao tō king (道德經の梵語譯に就て), Tp., 1916, p. 394-396. 所載。

Arousseau, B. E. F. E. O., 1911, 211-218. 所載參照。
②妻木直良、道教之研究、東洋學報、第一卷、一九一一年、第二卷、一九一二年、五八一七五頁所載。

③P. Wiegner, Taoïsme, t. I, Bibliographie générale (道教、第一卷、一般書目), 1911.

④Pelliot, Les Mo-ni et le Houa Hou king (摩尼と花經), B. E. F. E. O., 1903, 324-327. 所載。(同、1906, 379-384. 參照) Une bibliothèque médiévale retrouvée au Kan-sou (甘肅で発見された中世の藏書), 同、1908,

515-517. 所載。その中の一章、第十章は羅振玉氏がその著敦煌石室遺書(一九一一年)中に寫眞複製を載せて居る。

⑤De Harlez, Textes taoïstes traduits des originaux chinois et commentés (漢文原典の道教文獻の翻譯と註釋), Ann. Mus. Guimet, t. XX, 1891. 所載。

Falfour, Taoist texts, ethical, political and speculative, 1884.

⑥Chavannes, Le Jet du Dragon (投龍鱗), Mém. concern. l'Asie orient., III, 1919, 53-220. 所載。

⑦Edkins, A sketch of the taoist mythology in its modern form, J. N. Ch. Er. 1869, 303-314. 所載。

Mueller, Ueber das taoistische Pantheon der Chinesen, seine Grundlage und seine historische Entwicklung (支那人の道教のパンtheonとその根據及び歴史的發展), Zeitsch. f. Ethnologie, 1911, 303-428. 所載。

⑧Edkins, Account of Kwanti (關帝), the God of the war, North China Herald, 1856, n° 313-314. 所載。
Mayers, On Wen-chang(文昌) the God of literature, J. N. Ch. Br., 1869-70, n° 6, 31-44. 所載。

Peter C. Ling, The 8 Immortals of the taoist religion, 同、XLIX, 1918, 53-75. 所載等。

⑨De Groot, Secularism and religious persecution in China, 1903-04, Verhandl. k. Ak. Wiss., t. VI. 所載。